

News Letter

No.3 2010.7

世界と共創する文学研究の新拠点 — WIJLC ホームページ開設

ご挨拶

WIJLC ホームページの運用が開始されました。2010年5月21日から試験運用を開始し、秋期の本格運用を目指します。今年の3月から本格的に制作が開始され、3ヶ月という準備期間の中で立ち上げたため、まだいくつかの不具合がありますが、当ホームページの目標である「WIJLCの研究成果を世界に向けて発信する場」としての機能は十分に果たせる段階にきています。すでに早稲田大学文学学術院の「研究・教育活動」などからリンクが張られ、早稲田大学の研究プロジェクトの顔として認知されつつあります。

研究成果発表の拠点として

WIJLC ホームページは、重点領域研究「世界と共創する新しい日本文学・文化研究」の研究成果を対外的に発表する場として機能していくことを目的としています。

現在、ホームページでは各プロジェクトや当研究所の説明や理念をはじめ、ニュースレターのダウンロードや各種イベントの詳細などを中心に情報を掲載しております。

WIJLCの対外的な活動報告の拠点として、また各イベントのアーカイブとしての機能も持たせつつ、実践的かつ現実的な運用体制を敷いています。海外に派遣された先生がたから寄稿される「海外だより」や、現在進行で増加していく「リンク集」など、インターネットサイトであることを生かした様々な試みがコンテンツとして実装されています。こうしたコンテンツは将来にわたっても増設され、より便利に、より快適に、より豊富な情報量と高い検索性を持つサイトへと進化し続けていくでしょう。国際的な研究拠点を目指す私たちのホームページには、多言語に対応していく用意があります。まず、英語版サイトの準備を進めています。世界に発信する日本文学・文化研究の情報共有の拠点として、WIJLC ホームページは研究プロジェクトの中でもより重要なものとなっていくでしょう。

ホームページの紹介

簡単にホームページの内容を紹介いたしましょう。まずホームページのトップ画面をご覧ください。

トップ画面の上部には「HOME」「ご挨拶」「WIJLCとは」「各プロジェクトの概要」「成果報告」「ニュースレター」「リンク集」の各項目があります。

特に「ご挨拶」「WIJLCとは」「各プロジェクトの概要」などが、私たちの組織の理念や、各プロジェクトの活動を概観するものとして機能しております。まず、ここをじっくりと読んでみてください。現在活動する研究責任者やRAたちの名簿も掲載されております。

また左サイドにある「WIJLCプロジェクト」「Contents」「ツールとアクセス」の項目があります。そして少し下方にスクロールした所に「Event info」と「News letter & 成果報告」の報告が



WIJLC 重点領域研究「世界と共創する新しい日本文学・文化研究」
<http://www.j-lit-cul.com/index.html>

あります。これらが、今後 WIJLC の活動や講演会などの情報を紹介していく場所になります。重要なシンポジウムやワークショップ、講演会などは「Contents」の中に画像入りで大きく紹介され、特別にページを作って紹介していきます。現在では直近にあったコロンビアプロジェクトのD・B・ルーリー先生の講演会やアジアプロジェクトの朴先生の講演会などをサポートしています。各プロジェクトが開催した様々な催し物や発行物などの紹介、サイト全体の更新情報の紹介などを行っていくつもりです。定期的にサイトを訪れて、確認してみてください。「Event info」に掲載されている各種プロジェクトは、告知だけではなくチラシや立て看板などのデータもダウンロードできます。

また、独自のコンテンツとして「海外だより」のページがあります。「Contents」内のバナーからページへ飛ぶことができます。現在、日下力先生によるコロンビア大学からのDDP中間報告、兼築信行先生のワシントン大学便り、それから松本真輔先生の韓国慶熙大学日本語科の日本研修の三点が掲載されています。いわゆる研究情報とは異なって「現地」で見たものを報告していただく、海を隔てた研究機関で文学研究を行う人たちとの交流をそのままの温度で伝えていただけるようなコンテンツたらんとしたいと思います。そうして、WIJLCの活動がより身近に感じていただけるコンテンツも、順次用意していくつもりです。

進化し続けるサイトと共に

このように、WIJLCの活動を紹介していくサイトとして運用が開始されたサイトですが、細かい部位にも注意を払って制作されています。資料や書物に材をとり国際性を意識したアイコンのデザインや、各種プロジェクトのロゴ、文字サイズや暖色系でまとめられた色味など、飽きのない落ち着いたホームページになっています。今後もただの記事の羅列にとどまらず、より高いユーザビリティを目指して進化を続けていく所存です。もしご意見ご感想などありましたら、お気軽に連絡をください。皆様のご意見や、海外で協力をしてくださるスタッフのみなさまと協力しつつ、ホームページをよりよく改善していきます。

(ホームページ担当 RA 梅田 径)

D・B・ルーリー氏 (コロンビア大学) 特別講演会

言語思想史に於けるヒーローの役割 —— 稗田阿礼からチョムスキーまで ——

コロンビア・プロジェクト研究分担者 陣野英則

2010年5月28日(金)の15時より、早稲田大学戸山キャンパス33-2号館第一会議室にて、コロンビア大学東アジア言語文化学部准教授のデイヴィッド・バーネット・ルーリー David Barnett LURIE氏にご講演いただきました(早稲田大学国際日本文学・文化研究所主催)。当日は、さまざまな専門領域の大学院生、学部生、そして教員が多数参加され、大変な盛況でした。

ルーリー氏は、日本の上代・中古文学に関する研究を深めながら、日本語以外のさまざまな言語をも視野に入れて、文字と「ことば」のことを根源的に考察されている気鋭の研究者です。言語文化、言語史から、日本における中国文化受容などまで、その関心の領域はきわめて広く、さまざまな研究プロジェクトなどで活躍されています。近く刊行される予定のご著書では、日本の弥生時代から奈良時代にかけての、文字の出現とその展開に関する研究の成果がまとめられるとのことでした。

しかし、今回はこれまでの研究成果の一部ではなく、これから「ことば」と文学をめぐる研究をさらに拓いてゆくため、広いパースペクティブから、ある種の見取り図を示すところに主眼を置かれました。題して「言語思想史に於けるヒーローの役割——稗田阿礼からチョムスキーまで——」です。

講演では古代から近現代(8世紀から20世紀)までを見わたすような「言語思想史」がとりあげられたわけですが、ここにいる「言語思想史」については、深遠な意味での「言語思想」の歴史ではなく、また「言語学史」という狭い意味でもないということを示されました。副題にも名まえのみえる「ヒーロー」たちが自身の思考を学問として構築する際に特徴的にみえてくる「態度」と「役割」をとらえること、またそれによって学問における「発見」、もしくは後代における学問の「構築」のありようを明らかにすること——ルーリー氏の考察の企図は、以上のように説明されていたかとおもいます。



講演では、まず本居宣長『玉勝間』の「後の世ははづかしきものなる事」を引用され、学問研究の過去・現在・未来という時間の流れと「進展」の関係を示されました。宣長によれば、『万葉集』の注釈において、顕昭、仙覚に比べれば後代の契沖が、また契沖に比べれば真淵がどれほど高いレヴェルに達しているか、ということになるわけです(また宣長自身も師の真淵を超えていると示唆しているのでしょうか)。この一節を手がかりとして、ルーリー氏は、当の学問分野の歴史における前時代のヒーローの位置づけに注目されます。

たとえば、『古事記』の稗田阿礼の場合、そこに「進歩」「発展」といった考え方は示されていないのですが、鎌倉時代、行阿の『仮名文字遣』序においては、超人的な「ヒーロー」として空海が定位された上で、藤原定家と、行阿の祖父源親行という同時代の2人(いわば「祖父の世代」)の権威の融合が図られているとされます。また、日本近代の国語学者・上田萬年の場合は、少し前の日本語研究の伝統に対して批判的でありつつ、一方では国語学のルーツを前時代の漢学・和学に求めるといったありようがとらえられます。その際、近い過去は枠組みを変えるために「覆い隠され」、また批判されるわけです。一方、19世紀末以降、実にたくさんの「国語学史」が書籍として刊行されたこと、つまり学問分野そのものの歴史を論じるという営みが盛んであったことにも留意されています。要は、「国語学史」の枠組みにおいてもまた、前代のさらに前、「祖父の世代」とのつながりが重視されているということです。さらに、これとパラレルな関係が生成文法のノーム・チョムスキーの態度に見いだされるそうです。彼は、直前の世代であるブルームフィールド派を批判しつつ、ブルームフィールド派が侮蔑していたデカルト派言語学を高く評価しました。

ルーリー氏は、講演の最後に「ヒーロー」の態度と役割として、「漸進する態度」「覆い隠す態度」そして「祖父たちの動員enlisting」という3つのポイントを示され、それらが学問の正統性の獲得、さらに学問の生成の本質に大きく関わっていると指摘されました。

その後、早稲田大学教授・日下方氏より、「ことば」そのものの方が学問・研究よりも常に先に動いており、学問・研究はそれを後から追っているという面があるのではないか、という質問が出され、この点についてのやりとりがありました。

この講演では、「言語思想史に於けるヒーローの役割」をめぐるお話から、結局は学問・研究とはいかなるものなのか、いかに進展しうるものなのか、ということを示していただきました。ふだんの私たちが日本語研究・日本文学研究の中で対象化しえないような問題をクローズ・アップしつつ、学問・研究にたずさわる私たちに、メタ・レヴェルにおいて、その意義とありうべき進展のさまを示唆していただくという、大変ユニークな講演会でした。

北京師範大学教授張哲俊氏特別講演会

『万葉集』の柳の蘂と中国の「折楊柳」・柳圈

アジア・プロジェクト研究分担者 河野貴美子

本重点領域研究の活動の一環として、早稲田大学国際日本文学・文化研究所の主催により、北京師範大学教授張哲俊氏の特別講演会が、2010年6月15日(火)16:30から18:00まで、早稲田大学戸山キャンパス33-2号館2階第一会議室にて開催された。

張哲俊氏と早稲田大学との関係は深く、以前すでに早稲田大学においてご講演をいただいたことがあるほか、北京師範大学と早稲田大学プロジェクト研究所との共催で過去に2回国際シンポジウムを開催している。これらは、早稲田大学名誉教授故田中隆昭先生と張哲俊氏の指導教授である北京大学比較文学比較文化研究所所長巖紹壘教授が、長きにわたって親密に学术交流関係を築かれたことに端を発するものである。

そして今年に入って再び、張哲俊氏から、ちょうど派遣交換研究員として北京大学に滞在中であった河野に対して、本年9月に北京師範大学で開催が予定されている国際シンポジウムへの協力要請があった。それを受けて現在、シンポジウムの共催者として本重点領域研究が連携して開催準備を進めているところであり、このたび特にその最終打合せのため張哲俊氏に日本への出張を依頼し、合わせてこの機会にご講演をお願いした次第である。

張哲俊氏のご専門は、中国、日本、朝鮮にわたる、古代を中心とする比較文学研究である。『源氏物語』から謡曲まで研究対象は多岐に及ぶが、近年は文学作品における「柳」をテーマにさまざまな論考を発表しておられ、今回のご講演は、まもなく単著をまとめられるというその「柳」に関する日中比較文学研究の成果の一端をご披露いただくものとなった。

演題は「『万葉集』の柳の蘂と中国の「折楊柳」・柳圈」。はじめに、中島国彦文学学術院教授(早稲田大学国際日本文学・文化研究所所長)のご挨拶があり、司会の高松寿夫文学学術院教授(アジア・プロジェクト研究分担者)による講演者紹介に続き、約1時間のご講演をいただいた。会場には、学生、教員、一般合わせて約80名にもものぼる参加者が集まり、たいへん盛況であった。

ご講演は、『万葉集』にみえる「柳の蘂」を詠んだ和歌計九首を起

点として、従来の先行研究がこの「柳の蘂」の起源を、古来中国で送別の時に旅人の帰還を祈って贈られたという「折楊柳」や「柳環」の風習に求めることに疑問を投げかけるところからはじまった。張氏の調査によれば、唐代中期に至るまで、「折楊柳」に関わる詩に「柳環」が詠み込まれることはなく、本来、旅人に贈られた「折楊柳」は無事に「還」るよ



うにという発音に通じる「環」状のものではなかったのであった。ここで張氏は、『万葉集』歌にみえる「柳の蘂」が多く宴会時における作であることから、その起源を、中国の「柳圈」に由来するものとする新たな説を呈示された。「柳圈」は「柳の蘂」と同じく柳の枝を円形状に丸めて頭に戴くものである。そして中国の資料においては、曲水の宴において人々が「柳圈」を頭につけることが唐・中宗景龍年間には行われていたことが確認できるとのことである。また、中国で行われ始めた「柳圈」の習俗を日本に伝えたのは、養老年間に派遣された第八回遣唐使の時であったとの可能性もが示された。

ご講演の後は質疑応答の時間が設けられ、兼築信行文学学術院教授、池澤一郎文学学術院教授らから質問が出され、それらに対してさらに活発な議論が展開された。多忙なスケジュールの中、充実した講演内容を用意して下さった張哲俊氏に感謝申し上げるとともに、熱心に参加して下さい下さった各位に改めてお礼申し上げます。

9月に北京師範大学にて開催予定のシンポジウムは、「多元視野下的中国文学思想」をテーマとするもので、現在早稲田側からは10名が参加し講演及び研究発表を行う予定である。そのうち3名は、韓国やニュージーランドなど海外からの参加者を含む。実り多き国際学术交流の場となるよう、張哲俊氏には引き続きご協力をおおぐことになる。

ハルオ・シラネ氏(コロンビア大学教授)「日本文化研究奨励賞」受賞

本重点領域の研究分担者のハルオ・シラネ氏(コロンビア大学教授)が、このたび「平成21年度(第30回)上野五月記念日本文化研究奨励賞」を受賞。この賞は、氏の長年にわたる「日本文学及び日本文化」研究のめざましい功績に対して授与され、日本文学・文化の国際的な研究と後進の育成が受賞理由のひとつにあげられた。日本で出版された主要著書に、『夢の浮橋：源氏物語の詩学』(1992年、中央公論社、角川源義賞受賞)、『芭蕉の風景、文化の記憶』(2001年、角川書店、石田波郷賞受賞)、『創造された古典：カノン形成、国民国家、日本文学』(1999年、新曜社)などがある。また、英語圏で刊行された著書は下記の通り。

- *Envisioning The Tale of Genji: Media, Gender, and Cultural Production.* Editor and author. Columbia University Press, May, 2008. 400 pages.
- *Traditional Japanese Literature, Beginnings to 1600, An Anthology.* Editor and author. Columbia University Press, March, 2007. 1200 pages.
- *Classical Japanese Reader and Essential Dictionary.* Columbia University Press, Feb., 2007. 279 pages.
- *Classical Japanese, A Grammar.* Columbia University Press, August 2005. 525 pages.
- *Early Modern Japanese Literature: An Anthology.* Editor and author. Columbia University Press, 2002. 1130 pages.
- *Inventing the Classics: Canon Formation, National Identity, and Japanese Literature.* Co-editor with Tomi Suzuki and author. Stanford University Press, 2001. 300 pages. Korean edition translated by Sook Young Wang, published by Somyong Publishing Company, Dec. 2002.
- *Traces of Dreams: Landscape, Cultural Memory, and the Poetry of Basho.* Stanford University Press, 1997. 300 pages.
- *The Bridge of Dreams: A Poetics of The Tale of Genji.* Stanford University Press, 1987. 273 pages.

韓国における日本古典文学研究・教育の現状と課題

国立 HANBAT 大学校 日本語科 朴 蕙成

日本の若者の「活字離れ」が問題視される昨今だが、韓国も例外ではない。ここ数年、「文学というものにはむずかしいものだ」という考え方が、学生の間には広まっている。

大学院に進学する学生の専攻も圧倒的に「語学」、その中でも「日本語教育」や異文化コミュニケーションの観点から「日本学（日本の政治、経済、歴史、文化などを研究する学問の総称）」専攻者が増え、「文学」を専攻しようとする学生は年々減少している（資料）。その中でも「古典文学」を専攻しようとする学生はかなり少ない。

これは、IT やマネージメントなどに代表される「実用学問」を重視する社会的風潮の影響で、各大学の学科編成がこういった現象に密接に関わってきているということも一つの原因である。日本語学科のカリキュラムも文学を読み、分析、考察する力よりは社会に出てすぐ使える「会話（コミュニケーション）能力重視」の方向へと変わってきている。外国人にいかにも日本語を教えるべきかという立場の「日本語教育」という学問は、学生の文学軽視と相まって、ここ何年かの間に飛躍的に専攻者が増えている。

また、少子化の影響で定員割れが懸念される中、「受容者中心のカリキュラム」という観点から多くの大学が「専攻必須科目」

をなくした。これも一つの原因となって、「古典文法」科目が開設されない学科も多という。このような状況で、古典文学を専攻しようとする学生がなかなか増えないのは、もはや不思議なことではない。

では、こういった現状のなか、いかにしたら韓国での日本古典文学研究者が増えるのだろうか。まずは教師（教授）が授業内容を工夫し、学生に古典文学がおもしろく、現代にも通じる人生観があるという考えを持ってもらえるよう努力することである。また、専攻者が日本の古典文学を積極的に韓国語に翻訳出版し、日本古典文学を紹介することが解決への糸口になるのではないだろうかと筆者は思う。



資料 韓国外国語大学校大学院研究動向

年代	修 士				博 士			
	語学	文学	日本学	0	語学	文学	日本学	0
1970	13	29	0	0	0	0	0	0
1980	51	72	0	0	0	0	0	0
1990	55	111	7	2	5	0	0	0
2000	114	63	75	42	25	2	2	2
総計	233	275	82	44	30	2	2	2

研究所刊行物の紹介

『木下尚江資料集』刊行によせて

「メディア・書物・注釈プロジェクト」の活動の一つとして、文学学術院所蔵資料を整理・研究し、データベース化してweb上に公開する作業がある。その第一の成果が、今回国際日本文学・文化研究所を発行所として刊行された『木下尚江資料集』第一集（全96ページ）である。『木下尚江資料集』の意味あいについては、巻頭の「はしがき」の次の一節によくうかがえる。

ここに「木下尚江資料集」第一集として刊行するのは、尚江の子息木下正造氏より早稲田大学が譲り受け、現在文学学術院が所蔵する「木下尚江資料」のうち、「論説草稿」として分類されているもの的一部分である。一編を除きこれまで未発表のものであり、いずれも教文館から刊行された『木下尚江全集』全二十巻（一九九〇～二〇〇三年）に未収録の資料である。



これまで、早稲田大学文学学術院所蔵「木下尚江資料」のうち、整理がすんだものについては、「早稲田草稿」の名で、『木下尚江全集』第十九巻（二〇〇三・一二、九州大学教授清水靖久氏の編集）に紹介されている。今回紹介する資料は、そこに収録されていない未公開のものである。

今回紹介されたのは、その後整理がすんだものの一部、全22編の草稿で、長いものでは「[人性 政治 国家]」と仮題を付された、2段組み18ページもの論文があり、短いものでは2ページの草稿断片が目立つ。その多くは、明治20年代後半の、若き尚江の松本での在郷時代の草稿である。これまでこの時期については、資料が乏しいこともあり十分に考察されて来なかった。今後は、紹介された草稿にうかがわれる政治・経済・社会・宗教をめぐる若々しい思索の内実が、詳細に検討され、尚江研究に資するところが大きいと思われる。

読みやすく工夫された翻刻本文に、各草稿の冒頭部分の写真が添えられており、現物の面影をうかがうことのできるように配慮されている。書誌的な「解題」も整備されている。

本資料集は、早稲田大学特定課題研究として助成されたプロジェクトを引き継ぎ計画実施されたものであり、資料翻刻には大学院文学研究科博士課程の大学院生、宮坂康一・金子亜由美・大貫俊彦・解璞の4名の協力を得た。

web上での公開の準備も進んでおり、今年の秋には、その一部が実現する予定である。（資料整理・編集担当 中島国彦）

海外だより-3

ワシントン大学 (シアトル) より

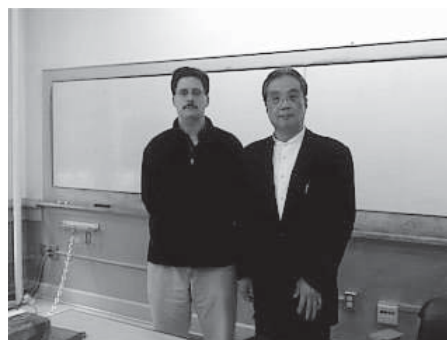
兼築信行

派遣交換研究員として、2010年4月1日に米国シアトルへ到着、ワシントン大学 (UW) のポール・S. アトキンス准教授のもと授業担当と研究とを行なっている。こちらの春学期は3月末開始のため、授業にはやや遅れて加わったが、大学院ゼミを担当するほか、同時期にこちらへ来たJWUのS教授が担当する文語文法の授業にも参加することとなった。

大学院ゼミ (110分×週2回) では、最初に渡部泰明『和歌とは何か』を読み、くずし字読解を訓練した後、『新古今集』『二見浦百首』『六百番歌合』に各4回を当てて読み進めてきた。それぞれのテキストについて、担当院生による作品概説、クローズリーディング、論文の読解、総合ディスカッションを行なう。受講生が最終ペーパーで取り上げるテーマにも十分な配慮が施されている。ペーパーのアブストラクトのチェック、文献書目の提出と、極めて緻密かつ合理的な指導法が確立されている点、目をみはるばかりである (単に私がズボラなだけかもしれないが)。

文語文法の授業 (80分×週3回) では、『百人一首』全歌を文法的に読解、25首ごとにクイズまたは試験が設定される。余技としてカルタ取りも行なった。クォーター制 (10週) は確かに集中的で、身につくものは大きい、学生も教員も大変だと感じた。

また、学術講演の頻度が驚異的だ。春学期にはその傾向が特に著しいよのだが、スタンフォード大学のスチーブン・カーター先生による連歌のお話など、刺激を受けること実に大であった。



研究方面では図書館の所蔵資料を拝見している。古典籍にあまり古いものはなく、若干の版本が存する程度。日系人から寄贈された未整理本の中に興味深いものが見受けられる。

文学研究者の端くれとして「邪苦損街」に永井荷風をしのび、パイオニアスクエア辺の古本屋や古美術商を冷やかしたところ、加賀千代女の掛幅を鑑定させられるはめになった。セーフコ球場のライト席にも一度だけ足を運んだ。それから、シアトル日本語補習学校での講演を引き受け、日系個人事業主の方々の勉強会にも招かれてお話をし、当地の諸事情への理解を深めることもできた。学期の終了 (6月4日) まで授業を行ない帰国の予定。

(2010年5月21日これを記す)

海外だより-4

コロンビア大学から DDP 報告

日下 力

2月22日に日本を立ち、3月26日までの滞在予定で、ニューヨークのコロンビア大学にてダブル・ディグリー・プログラム (DDP) に基づく集中講義を行っています。以下、その報告を日記風にお伝えします。

2・22 9時55分、ケネディ空港に到着。コロンビア大学の大学院生クリスティーナ・YIさんの出迎えを受ける。集中講義全体のお世話を戴いているのがハルオ・シラネ先生、そのシラネ先生の依頼を受けて出迎えてくださったのであった。タクシーで50分、ミルバーンホテルに着く。付近の買い物に便利なお店の案内をもらい、昼食を共にする。ご両親が韓国より来られたとのことで、在日韓国人文学者の研究を志しておられるという。

2・23 朝9時30分、シホ・タカイ (高井詩穂) さんが諸手続きの援助のために、ホテルに来てくださる。シラネ先生の指示によるもので、東大教養学部出身の大学院生、ご主人が弁護士で、大学の寮と一緒に住んでおられる。浄瑠璃のなかでの女性像の変遷が研究テーマのよし。今年9月から、DDPにより、クリスティーナさんとともに早稲田で勉学に励むことになっている。

出向いた先は、まず大学の事務所。非常勤講師としての資格確認。次に、納税者番号取得のため、公的機関に向かおうとするが、

同日中には手続きが無理と分かり、後日のこととする。大学図書館、講義の教室等を案内してもらい、シラネ先生の研究室へ。翌日の授業のために、前もって知らせてあったテキスト本文以外の資料をシホさんに渡し、受講生12人分のコピーをお願いする。

先生のご案内で、大学の高層棟にある食堂で昼食を取る。天気が良いれば見晴らしが素晴らしかったはずであったが、残念ながらこの日は雨天であった。

2・24 12時30分からの授業予定であったが、前の授業の使用許可が13時までとなっていたらしく混乱。12時45分からとなり、その待ち時間の間に学生の皆さんの自己紹介を受ける。

『保元物語』の為朝の英雄像の問題を中心に講義。持参していた鎧の部品の実物を、手にとってみてもらう。ヨーロッパの叙事詩における英雄像との異質性にも言及したもの、どれだけ説明しえたか、時間不足で不安が残る。予定の15時30分を10分ほどオーバー。

2・25 シホさんに再びホテルに来てもらい、市の中心部に出かけて、公的機関での納税者番号取得の手続きを済ませる。昼食を共にする。夕方より雪となる。水を含んだボタン雪。テレビの画面に、Snow Showerの文字。

2・26 夜7時より中華料理店にて懇親会。雪解けの道を苦労して歩く。積雪は20センチ余り。学生の皆さんが代わる代わる隣の席に

座り、自分のことを話してください。ドイツからの留学生ダニエル君は、9月から早稲田へとのこと、アルゼンチン出身のアリエル君は6月から、2年後の本格的留学の前に早稲田での授業を経験したく、渡日予定と聞く。中国からの留学生の方もいて、まさに国際的な環境の中にいることを実感。市内を歩いていても、様々な国から人びとが集まっていることが分かり、シラネ先生の、「アメリカは移民文化」という言葉が、素直に理解できる。懇親会はにぎやかに、11時まで続いた。

2・27 アリエル君が早稲田で和歌の授業を受けたいということだったので、高松先生にメール、新年度の授業予定を知らせてもらう。

3・3 第二回目の講義。『平家物語』から「敦盛最期」「知章最期」「小宰相身投げ」「千手前」「重衡最期」を話す。最後に、『イリアス』との比較も一言。

アリエル君に、高松先生からのメール内容を紹介。

3・4、5 メトロポリタン美術館は、セントラル・パークを横切って30分ほどの近さなので、2日間続けて通うも、全部はなお見切れず。館内にワイン・コーナーや食堂もあり、両日とも昼食はそこで。

3・7 シラネ先生のご提案で、国文学資料館の調査のためにニューヨークに来ている立教大学の小峯和明氏と一緒に、モダン・ダンス (PAUL TAYLOR) を観る。皮肉を利かせたパロディ、それに戦争の重いテーマ。

3・10 第三回目の講義。漢籍受容の問題から、『太平記』への軍記文学の展開の問題、さらに『平治物語絵巻』を解説するという、盛りだくさんの内容で、時間を15分オーバー。

授業後、4月から8月まで、早稲田に来られるデビット・ルーリー先生を紹介される。古代文学、言語に関する研究をしておられる。奥様は日本の方ということで、4歳になるお嬢さんの写真が、研究室のあちらこちらに。

3・11 国文学資料館のメトロポリタン美術館調査団に同行、アジア美術部主任研究員の渡辺雅子氏のご好意による。これも、シラネ先生のご配慮から。

調査対象であった『平治物語絵巻』断簡については、そうではないであろうことを、意見として伝える。

3・13、14 Long Island の Sound Beach に住む長瀬絵葉さんを訪ねる。2時間の列車の旅。絵葉さんは、ニューヨーク州立大学の Stony Brook 校で教鞭を取られており、国際教養学部の学生を中心に早稲田からの留学生受け入れの責任者を務めておられるとのこと。今年は文学部からも2人来ています。絵葉さんは、私の昔の教え子の親友で、一度お会いしたことがあったが、今回、物理科学者として国立研究機関にお勤めのご主人とも親交を深めることができ、楽しい旅であった。風雨に見舞われた旅が、その風景とともに印象に残る。

3・15 ノイエ美術館で、OTTO DIX 展を見る。第一次世界大戦で砲兵として参戦、戦争の惨状を迫力のあるモノクロの細密画とし

て残した画家。初めてその存在を知ることができた。美術館へは、コロンビア大学の教員証を提示することで、無料または割引で入れるのは、ありがたいことであった。

3・17 今週は一週間、大学の休暇に当たるので、授業はなし。17日はセント・パトリック教会の祭りということで、バグ・パイプの演奏による大行進を見る。アメリカの歴史は移民に始まることを、改めて思う。

3・19 十重田裕一先生、来米。同じホテルに宿泊。22日にコロンビア大学で講演を行い、翌日はプリンストン大学での学会に出席、口頭発表をされる予定とのこと。

3・20 シラネ先生の奥様、鈴木登美先生の父上の訃報を知らされる。お二人とも日本におられ、葬儀を済ませてから離日されるとのこと、それは、私が帰国した後の28日。ニューヨークでお会いすることは、できないこととなる。それでも、教え子の方々が、色々取り計らってください、最終授業など、滞りなく済ませることができそう。

3・22 午後4時より6時まで、十重田先生の「占領期の『日本文学』」というタイトルによるレクチャーと、それに続く大学院生との討論会。資料が整備され、インターネット検索で様々な課題が追求可能となった状況を紹介され、触発された大学院生諸君の活発な発言が続いた。その後、十重田先生の歓迎会と私の送別会を催してください。20名前後の出席。

3・24 最終講義を行う。芸能と軍記文学との関係を、という要望に従い、琵琶法師と盲女の語りの歴史の変遷を概説したのち、用意した平曲と瞽女の演奏のテープを聴いてもらう。最後は、盲女の語り物であった可能性の高い常葉の話について、その密度の濃い文学性を語って終える。5分超過。質問でさらに10分超過。休憩を途中で入れながら、毎回3時間を越える授業となった。

3・26 13時のフライトでニューヨークを立ち、翌日15時、帰国。

3・28 ニューヨークでお会いできなかったシラネ先生と、渋谷で昼食を取る。そのとき、学生諸君の授業感想文を見せられる。最終講義後の25日を締め切りにして、メールで提出させたものとのこと。その速さに驚く。みな、それなりに刺激を受けてくれたらしく、安堵する。今後、軍記物語の代表的な章段を、現代語訳から英訳して出版できないかとの相談も受ける。

32日間のニューヨーク滞在、輻輳した社会を肌で感じ、百見聞は一体験に如かずと思うこと、しきりであった。受講生の優れた日本語能力と熱意にも、心動かされた。9月からは、コロンビア大学博士課程3年の4人が、文学修士の資格取得を目指して早稲田に来る。在日朝鮮人文学のクリスティーナ・イ、浄瑠璃の高井詩穂、近世における漢籍受容のナン・ハートマン、和漢比較のダニエル・ポッポの諸氏。日本の学生諸君や教員との交流の輪が、さまざまな局面で広がってくれば嬉しい限りで、受け入れる側としてもそうした環境の醸成に意識的でなければならぬと思う。

活動予定

9月22日(水) アジア・プロジェクト ローレンス・マルソー氏特別講演会
「見えないものの肖像画集——鳥山石燕の「画図百鬼夜行」管見——」
(早稲田大学戸山キャンパス 39号館5階第5会議室)

9月24日(土)、25日(日) アジア・プロジェクト 国際シンポジウム
「多元視野下的中国文学思想」(北京師範大学)

10月16日(土) イナルコ・プロジェクト 国際ワークショップ
「記憶の痕跡」

11月13日(土) 現代・制度・都市プロジェクト
国際シンポジウム、研究発表、講演集会
「越境する歴史×時代小説」

2010年度RAメンバー (2010・7現在、7名)

庄司 敏子 (コロンビア・プロジェクト、ニュースレター担当)
塩野 加織 (コロンビア・プロジェクト、ニュースレター担当)
梅田 徑 (HP構築・管理担当)
奥間 政作 (イナルコ・プロジェクト美術部門担当)
大川内夏樹 (イナルコ・プロジェクト文学部門担当)
柳本 真澄 (アジア・プロジェクト担当)
橋本あゆみ (現代・制度・都市プロジェクト担当)

重点領域研究「世界と共創する新しい日本文学・日本文化研究」

News Letter 第3号 2010年7月29日発行

編集：庄司敏子・塩野加織 (RA) 印刷所：三美印刷

発行所：〒162-8233 東京都新宿区戸山1-24-1

早稲田大学戸山キャンパス 39号館 2508 研究室

早稲田大学国際日本文学・文化研究所 (WIJLC) (所長・中島国彦)

ホームページ：http://www.j-lit-cul.com